

ク ル メ ツ ツ ジ の

生 立 ち と 栽 培

野菜試験場久留米支場 国 重 正 昭
花卉栽培研究室長

ク ル メ ツ ツ ジ の 生 い 立 ち

クルメツツジとは、今から約200年前の正保年間に久留米藩御馬廻り役・坂本元蔵によって、品種改良の端緒がひらかれたツツジです。坂本元蔵は当時、江戸を中心に栽培が流行していたキリシマツツジや、九州の山野に自生しているツツジを集めて栽培する一方、実生による品種改良を試みました。

当初、ツツジの実生方法がわからず、失敗を重ねていたのですが、たまたま手からこぼれた種子が、庭の苔の上で発芽しているのをみて、苔を利用したツツジの実生法を会得したといわれています。

ツツジの種子は好光性ですので、他の植物の種子のように、土を使って覆土する播種方法では、光線がさえぎられて発芽してきません。必ず種子に光線が当たるよう、覆土なしの、露出させた状態で播種しなければなりません。その点、苔の上は光線も充分あり、しかも水分が常に含まれていて種子が乾燥することもないので、ツツジの発芽床としては理想的な環境をそなえています。

現在では、水苔やピート、鹿沼土を使って発芽床を作りますが、ごく近年まで、ツツジ愛好家で実生を試みた人は、実生床として庭苔を利用していました。

このようにして坂本元蔵は、クルメツツジの実生による品種改良に成功し、彼の時代に育種された品種の多くは、今日も名花として広く愛培されています。

坂本元蔵以後、クルメツツジの品種改良の努力は、主として久留米藩の藩土の間で受けつがれてきましたが、明治以後の品種改良は、植木業者が

行なりようになりました。

そのため、明治以降、発表される品種の数は急激に増えて、現在までに約800品種が命名されています。しかしその多くは途中で消滅し、現在の品種数は約300となっています。

クルメツツジは、久留米地区という狭い範囲で栽培されていたため、世間にはあまり知られずにはいましたが、大正7年にアメリカ、ハーバード大学のウィルソン博士が来日してその美しさに驚き翌年、再び来日してクルメツツジの品種・50品種をアメリカのアーボレータムに導入、ウィルソンズ・フィフティ(50)としてアメリカ・ヨーロッパに紹介して以来、クルメ・アザレアの名は、日本よりむしろアメリカやヨーロッパで有名になっていました。

日本でクルメツツジの名がよく知られるようになったのは戦後で、ちょうど花の咲く時期が4月末から5月始めにかけての連休(ゴールデンウィーク)に当たると、花の色彩が豊富で派手なため行楽地の植え込み材料として大量に使われるようになってきてからです。

それまでのクルメツツジは、主として鉢植えの盆栽用、あるいは個人の庭園用として利用されてきていたのです。

ク ル メ ツ ツ ジ の 特 徴

クルメツツジの特徴は、まず花色の豊富さにあります。白・紫・赤・赤紫・桃・ピンクおよび、それぞれの絞り花と変異の巾が大きく、そのうえ花付きが多いので、開花期には樹全体が花におおわれたように咲いて、美事な景観を呈します。

さらにもう一つの特徴は、ホーズインホーズ咲、つまり萼の弁化した2重咲きの品種が多いこ

とで、普通の花の場合、雄雌の弁化した八重咲のものはありますが、萼の弁化したものは珍しく、クルメツツジの大きな特徴になっています。

この萼の弁化した二重咲きのものは、花器の構造から結実することがないので、盆栽や庭植のツツジで、毎年、花のあと樹勢を弱らせないために行なう花つみの作業をする必要がない利点があります。

次の特徴は、花のあとに葉が出ることで、サツキや平戸ツツジ、ヤマツツジ等は、花の時期には既に葉がでているのですが、クルメツツジでは、花期にはまだ新芽が伸びておらず、花付きの良さを一層引き立たせています。花の時期は普通のツツジよりやや早く、久留米では4月中旬、本州では4月下旬から5月上旬となります。

完成されたクルメツツジ盆栽



樹姿は、どちらかというと立性で、枝が上伸する性質があります。その点、サツキのように樹が横広がりになって、いつまでも樹姿がくずれない樹種にくらべ、樹型を保つためには、剪定を花のあと、なるべく早い時期に行なうことが必要です。

クルメツツジの樹種と栽培

現在、クルメツツジは主として庭・公園植込み用に使われていますが、品種も色の濃い、限られた数品種しか大量生産されていませんが、本来クルメツツジは、盆栽用の種類として改良されてきたもので、盆栽用の品種は白に近い薄紫・薄桃

の品種が多く、観賞の仕方も、独特の丸鉢に植込み、武者仕立て、傘づくり、見台づくり、梵天づくり等の形に仕立てられます。

栽培は露地で行ないませんが、花時には、室内に持ちこんで観賞するものです。室内の軟光線の下では、クルメツツジの微妙な薄色の花色は非常に上品な色に引き立って見え、室内ですので、観賞期間も長く楽しむことができます。

戦前には花時になると、愛好家は座敷いっばいにクルメツツジの鉢を飾り、互い訪問しあってその年の咲きぐあいを競い、実生による新花が咲くと、全員が集まって批評検討し、価値ありと認められたものには、品種名を考えあったといわれています。現在でも、クルメツツジの愛好家は、戦前と同様、花時には座敷に鉢を飾って来訪者に展示しています。

クルメツツジは、盆栽としてはサツキよりつくりにくいのですが、過湿にならぬよう用土を選び1～2年毎に植えかえをしてゆけば、サツキ同様毎年、観賞することができますし、サツキに負けぬ樹型の盆栽をつくることができます。

クルメツツジの盆栽は、普通、2月～3月に庭や畑植えの荒木を掘りあげて、土を水で完全に洗い落とし、根を整理し、地上部の枝を形よく切り込んで鉢上げし、その年、幹から吹きだした枝のうち、必要な部分だけ残して大枝配りを行ない、その後、3～4年、その大枝に小枝をつけるように剪定、肥培管理を行なって仕立ててゆきます。

庭や畠に植えられた老株は、根元から出ている多数の幹はそれぞれ細くても、根ぎわは太く一本にまとまっており、そこを利用すれば根張りのよい盆栽に仕立てることができます。

庭園用に刈込まれたクルメツツジ

